



14 秋爽 小坂芝田 十曲一雙

大正元年(一九一二年) 絹本着色  
一七〇・〇×六二五・〇

小坂芝田(一八七二〜一九一七)は、長野県上伊那郡旧小沢村(現伊那市)に生まれ、郷里の画家で田能村直入門下の児玉果亭に師事した。上京後は日本美術協会に所属するとともに、明治三十九年には山岡米華とともに日本南宗画会を創立し、文展では第二回以降受賞を重ねた。この頃、日本美術協会系の旧派と日本美術院系の新派の対立が強まり、文展の日本画部は大正元年(一九一二年)の第六回から旧派を対象とした第一科と新派を対象とした第二科に分かれ、審査も別個になされるようになった。そうした中、第一科で最高位の二等賞を受賞したのが津端道彦と小坂芝田の二人であった。芝田の絵は文展開設前から日本美術協会展覧会においてしばしば宮内省に買い上げられてきたが、本図も見事買上げの榮に浴した。

この頃、小坂芝田を始め、山岡米華、小室翠雲、松林桂月ら近代南画家が文展に出品した作品を見ると、画面の大型化や平易な描写表現など、展覧会で鑑賞されることを意識した会場芸術としての性格が色濃くなっていることが分かる。その中でも芝田は、毎回屏風形式で作品を出品し続け、他の南画家が大画面形式を持てあます中、岩塊や木々などのモチーフを堅実に組み立てていく画面構成によりスケールの大きな山水図様式を確立した。本図は十曲一隻という変則的な屏風の形状を効果的に用いて、なだらかに山水が左右へ展開する。その中に点景のように庵と人物が描き込むことで、自然の広大さを強調する理知的な空間構成は、明らかに近代的な感覚と言えよう。一方で、本図の山や岩塊の皴法や木々、溪流の描写などは、写生を基礎としながらも近世の南画家たちが広く手本としていた「芥子園画伝」や「八種画譜」などの学習成果がうかがえる。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

古典再生 — 作家たちの挑戦

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 72

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十八年三月二十六日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sanjūmaru Shōzokan